

軾在潁州 與趙德麟同治西湖 未成 改揚州。三月十六日 湖成 德麟有詩見懷 次其韻。

軾潁州に在り 趙德麟と共に西湖を治む 未だ成らざるに 揚州に改めらる 三月十六日 湖成り 德麟 詩有り懷はる 其の韻に次す

1 太山秋毫兩無窮 たいざん しゅうごう ふた

2 鉅細本出相形中 きよさい もと そうけい

3 大千起滅一塵裏 きめつ いちじん うち

4 未覺杭潁誰雌雄 みだ覚えず こうえい 誰か 雌雄するを

5 我在錢塘拓湖淥 せんとう 湖を拓き

6 大隄士女爭昌丰 だいてい 士女 昌丰を争う

7 六橋橫絕天漢上 おうぜつ 天漢の上

8 北山始與南屏通 なんぺい 通ず

9 忽驚二十五萬丈 おち驚く 二十五万丈

10 老葑席卷蒼雲空 ろうほう せつけん 蒼雲空し

11 竭來潁尾弄秋色 けつらい えいび 秋色を弄す

12 一水縈帶昭靈宮 えいたい 昭靈宮

13 坐思吳越不可到 そざろ 坐に思ふ 吳越 到る可からず

14 借君月斧修腫臃 げつふ 君に 月斧を借して 腫臃を修す

15 二十四橋亦有何有 二十四橋 亦た何か有らむ

16 換此十頃玻璃風 じつけい 玻璃の風に換へん

17 雷塘水乾禾黍滿 らいとう 雷塘水乾いて 禾黍満つ

18 寶釵耕出餘鸞龍 ほうさい 耕より出でて 鸞龍を余す

19 明年詩客來弔古 いにしえ 明年 詩客 来つて 古を弔はんには

20 伴我霜夜號秋蟲 そうや 我が 霜夜に 秋虫を号ぶを伴へ

軾在潁州 與趙德麟同治西湖 未成 改揚州。三月十六日 湖成 德麟有詩見懷 次其韻。

- 1 太山秋毫兩無窮 たいざん しゅうごう ふた 太山 秋毫 両つながら窮まり無し きよさい もと そうけい
- 2 鉅細本出相形中 鉅細 本 相形の中より出ず きめつ いちじん うち
- 3 大千起滅一塵裏 大千 起滅 一塵の裏 こうえい こうえい しゅう
- 4 未覺杭穎誰雌雄* 未だ覺えず 杭穎 誰か雌雄するを せんとう こりよく ひら
- 5 我在錢塘拓湖淥 我 錢塘に在つて 湖淥を拓き だいてい しょうぶ
- 6 大隄士女爭昌丰 大隄の 士女 昌丰を争う おうぜつ
- 7 六橋橫絶天漢上 六橋 横絶す 天漢の上 なんべい
- 8 北山始與南屏通 北山 始めて 南屏と通ず
- 9 忽驚二十五萬丈 忽ち驚く 二十五萬丈 ろうほう せっけん
- 10 老葑席卷蒼雲空 老葑 席卷して 蒼雲空し * 來詩云與杭爭雄 來詩に云う 杭と雄を争うと

【語釈】

泰山の大小も秋毫の小も、ともに一無窮、鉅細ともに造化の形づくったもので一の無である。大千世界は空花の起滅するようなもの、その中の一塵に身を寄せているので 杭州の西湖と潁州の西湖との優劣をくらべる人があるうとは知らなかった。

わたくしは杭州の任にいたとき、西湖をさらえて水を清ませ堤を築いた。堤の上をゆきかう男女はその美を競い、堤には六つの槁を設けて、天の川に長堤がかけわたされたよう。かくて北山と南屏山とが始めて手をつないだのである。

(はじめ 湖上のまこもは)二十五萬丈と見積もられたのにはいささか驚いたが、そのわだかまったまこもの根も、むしろを巻くように取りはらわれ、湖面を蔽っていた青い雲はすっかりなくなった。

• 元祐七年(一〇九二)57 三月、揚州の任に在つて作る。潁州の任に在つたとき、趙德麟とともに潁州の西湖を改修する工事にとりかかった。完成をみないで揚州に転任して来たところ、この三月十六日に完成したとの報せに趙德麟が詩をつけて、その友情を寄せて来た、その詩に次韻した作。

• 趙德麟 宋の王族で安定王の姪。

• 西湖 潁州の西湖。

• 太山秋毫 太山は泰山に同じ。荘子の齊物論に「天下に秋毫の末より大なるは莫し。而して太山を小と為す」秋毫とは秋に生えかわつた動物の細い毛。• 阿無窮 荘子の齊物論に「是も亦た一無窮非も亦た一無窮」• 相形中 老子に「物これを形し、勢これを成す」(第五十一章) • 大千 仏教でいう大千世界。広大無辺の世界

• 起滅 王註に引く仏典に「三千世界は猶空花(疲れた目にチラチラ見えるもの)乱起乱滅するがごとし。而るに況や我此の空花起滅の中に或るをや」

• 難雄雌 この句に
自注がある。また王直方詩話に、東坡がひきつづいて知事となつた杭州・潁州ともに西湖があるので、潁州の人が東坡に、「あなたは西湖の中に遊んでおられれば、それで公務が果たせますね」と言つたといふ。• 錢塘 杭州。• 拓湖淥 淥は清らかな水。いわゆる蘇隄を築いたこと。年表の元祐五年(一〇九〇)を参照。

• 大隄士女 東坡の襄陽集(東坡詩集卷四十八)に「朝に襄陽の城を発し、莫に大隄の宿に至る。大隄の諸女兒、花のごとく艶やかにして郎が目を驚かす」隄も堤も同じ、つつみ。• 昌丰 詩經の鄭風の丰の詩に「子之丰兮、……」「子之昌兮、……」。六橋 いまも蘇隄には六つの橋がある。• 南屏 山の名。杭州西湖の名勝。二十五萬丈 西湖を埋める葑(まこもの根)をいう。東坡の、杭州西湖を修めんことを奏する状に、「国初より以来、稍く廢して治めず、水濁れ草生じて漸く葑田と成る。…湖上の葑田を打量するに、計二十五萬余丈、度用二十余万工」

11 竭來穎尾弄秋色
けつらい えいび
竭來 穎尾 秋色を弄す

12 一水縈帶昭靈宮
いすい えいたい
一水 縈帶す 昭靈宮

13 坐思吳越不可到
そそろ
坐に思ふ 吳越 到る可からず

14 借君月斧修臙臙
げつふ
君に 月斧を借して 臙臙を修す

15 二十四橋亦何有
二十四橋 亦た何か有らむ

16 換此十頃玻璃風
じっけい はり
此の十頃 玻璃の風に換へん

17 雷塘水乾禾黍滿
らいとう
雷塘 水乾いて 禾黍滿つ

18 寶釵耕出餘鸞龍
ほうさい こう
寶釵 耕より出でて 鸞龍を余す

19 明年詩客來弔古
いにしえ とむら
明年 詩客 來つて 古を弔はんには

20 伴我霜夜號秋蟲
そうや
我が 霜夜に 秋虫を号ぶを伴へ

* 德麟見約來揚寄居 亦有意求揚倅

德麟來揚に來つて寄居することを約せ見る。

亦た揚の倅を求むるに意あり。

【解釈】

その後、潁水の下流に秋を探ると、その地には一筋の川が昭靈宮をめぐって流れていた。

しかし、この流れではどうも呉越へ行けそうにないと思えたので、君に、月の宮殿を修築するまさを惜し与え、（潁州の西湖の水面の）おぼろにかすむ光を輝かせてもらおうことにしたのだった。

（それがいま完成したとの由）揚州の名勝、二十四橋などはとるに足らぬ。ガラスのような十頃の水面に風の吹きわたる潁州の西湖ととりかえてもらいたいものだ。

揚州の勝蹟、雷塘では水が涸れて、稲ときびとがよく育っている。往時の宮女の豪華なかんざしが、この地を耕すと、ときどき堀り出され、鳳凰や竜のかざりもそのままに残っている。

明年、詩情あるわが友がこの地へ赴任して来て、古蹟を弔おうとなさることがあれば、霜ふる夜に秋の虫のすだくがごとく苦吟するこのわたくしを、伴なっていたらどう。

漢文大系 蘇東坡 近藤光男より抄出

・竭來 爾來。そのとき。以來。竭は発語の辭。 ・縈帶 うねりとまわく。

・月斧 まさかり。西陽雜俎に、鄭仁本仁表の兄弟が、嵩山で道に迷い、月の宮殿を修築するという人に出逢ったが、その人は斧斤と玉の屑の飯とをもっていた。

・臙臙 月のおぼろなさま。

・二十四橋 隋のとき揚州に二十四橋を置いた（輿地記勝）が、存廃がある。杜牧の詩に「二十四橋明月夜」揚州の韓綽判官に寄す 集卷四。また一橋の名とし、二十四人の美人が簫を吹いたのによると（揚州画舫録）。

・換此 歐陽修が揚州から潁州の知に移つて（皇祐二年、一〇五〇） 作った詩に「都て二十四橋の月を將て、西湖十頃の秋に換へ得ん」(西湖戲作、同遊の者に示す 集卷十二)。

・玻璃 玻璃、ガラス。歐陽修の初めて潁州西湖に至るの詩（集卷十一）に、「平湖十頃碧琉璃」琉璃もガラス。温故要略に「天、水を見ては琉璃を思い、人、水を見ては水を思う」（一水四見といって同じものでも見る人によって見かたのちがうことをいう）

・雷塘 揚州の東北十里、隋の煬帝の葬られた所。

・宝釵 宝玉で作った貴いかんざし。

・倅 副官。揚州の倅とは揚州通判。